

業務改善図り 障害者雇用

ススキノを中心に営業する酒類販売の「リカーズかめはた」(札幌市豊平区)は、5年前から障害者を雇い始めた。現在、4人が働いている。きっかけは業務改善。専門の担当者任せの仕事を、誰でもできるように工夫した結果、障害者の雇用に結びついたという。(中原洋之輔)

札幌の酒類販売「かめはた」

受注処理工夫、誰でも可能に

11月中旬、午前5時すぎ。受注業務担当のAさん(33)は手際よく伝票を処理していた。「5時を過ぎると、一息つけるんです」。笑顔

目で、障害基礎年金と合わせ1カ月22〜23万円の収入があり、「自分にぴったり」と喜ぶ。

業務部長の関吉弘さん(56)は「受注業務は一部社員の職人芸頼りでした」

同社は札幌を中心に200軒以上の居酒屋などに

で話してくれた。

Aさんは慢性腎炎で18歳から透析を始めた。現在、身体障害(1級)の認定を受け、週3回通院している。仕事が終わるのは正午ごろ。透析は午後2時30分から始まり、同7時ごろ終了。帰宅して同9時には就寝する。翌日午前2時すぎに起きて出社、正午すぎに帰宅。透析のない午後は、ゆったり過ごすというリズムだ。

自分にぴったり

「透析が日中なので、仕事がなかなか見つからなかった」とAさん。入社5年



パソコンの前で受注作業に取り組むAさん。手際よく伝票を作成する＝「リカーズかめはた」の事務所内

酒を卸しており、注文は1日約1000件。このうち約300件は店が終わった深夜、同社の留守番電話に吹き込まれる。

しかし、酔った店主らが店の名前や酒の銘柄を言い忘れるのはしょっちゅう。社員二人が「この声は××さん」「この人の『酒1本』は××の一升びんのこと」と判別、伝票を作っていた。

そこで、6年前に新システムを導入。電話番号と店名、過去の発注データをパソコン画面で一括表示し、留守番電話を聞きながら、誰でも伝票処理ができるよう改善した。

ゼロから4人に

「担当の二人は病欠も無理でしたから」と関さん。ただ受注業務は日中の配達に間に合わせるため、深夜から早朝の仕事だ。「長く働き続けてくれる人はいな

いか」と考えた関さんが行きたったのが障害者雇用だった。

実はAさん以外に、下半身に障害のある男性一人も受注業務担当で採用している。さらに配送業務でも知的障害者を雇うなど、業務改善を契機に、ゼロだった障害者が一気に4人に増えたという。

もちろん、雇用するメリットはある。障害者一人の雇用で年間30〜120万円の助成金が1年から1年半、国から支給されるほか、税制面の優遇もある。関さんはこうした点も社員に説明するべきだという。「そうすれば障害者雇用に理解が広がる」と指摘する。

北海道中小企業家同友会は、同社の取り組みを11月に開かれたフォーラムで紹介。「業務改善が新たな雇用を生み出したと言える」と評価している。